Osaka University Knowledge Archive

Title	沖縄系2世における言語生活史と日本語保持に関わる要因 : ブラジルとボリビアの沖縄系移民社会の場合
Author(s)	朴, 秀娟; 森, 幸一; 工藤, 真由美
Citation	阪大日本語研究. 2014, 26, p. 1-32
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/50081
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

沖縄系 2 世における言語生活史と日本語保持に関わる要因
―ブラジルとボリビアの沖縄系移民社会の場合―
Change of language use and factors that enhance Japanese language maintenance among second-generation Okinawan immigrants in Brazil and Bolivia

朴　秀娟・森　幸一・工藤　真由美
PARK Sooyun・MORI Koichi・KUDO Mayumi

キーワード：2 世、言語生活史、日本語保持、就学以前の使用言語、教育体制、生活戦術

要旨

白岩ほか（2011）、朴ほか（2013）で分析したように、ブラジルとボリビアの沖縄系移民社会では、2 世において、現地語へのモノリンガル化が進むか否かの違いが見られる。今回さらに分析を進めた結果、1 世成人移民の移住当初の言語使用においては、2 つのコミュニティ間の違いがほとんどないにも関わらず、2 世の言語生活史を見ると、就学以前の家庭内と友人との言語使用において、現地語中心か日本語中心かの違いが顕著に現れていることが明らかになった。この違いは、生活戦術の違い、そしてそれに関係する日本語学習歴の違いと深く関わっていると思われる。

1. はじめに

言語交替は、一般には、3 世代にわたって行われるとされている。しかし、ブラジルとボリビアの沖縄系エスニックコミュニティにおける言語交替には異なった様相が見られる。白岩ほか（2011）でも述べたように、ブラジルのビラ・カロン（Vila Carrão）地区では、2 世においてすでに現地語であるポルトガル語へのモノリンガル化が進んでおり、一方、ボリビアのオキナワ第一移住地では、2 世のみならず 3 世においても日本語が保持されているのである。

次の図 1 に示す結果は、ブラジル・サンパウロ市のビラ・カロン地区とボリビアのオキナワ第一移住地における、1 世から 3 世を対象に実施した言語生活調査の中から、調査時（ビラ・カロン地区では 2005 年、オキナワ第一移住地では 2007 年）における言語使用と言語能力意識に関する項目を分析して明らかにしたものである。両コミュニティにおける日本語保持の違いは、大きくは、2 世を境に見られ始める。（なお、1 世の言語能力意識についていえば、両コミュニティ間に大きな違いは見られないのだが、後述するように、特

に 1 世子ども移民の「読み書き」能力意識については違いがでてきている。）

図 1　ブラジル（上）とボリビア（下）の沖縄系エスニックコミュニティにおける言語交替

	1世成人	→→	1世子ども(準2世)	→→	2世	→→	3世
日本語	○		○		×		×
沖縄方言	○		△		×		×
ポルトガル語	△		○		○		○

	1世成人	→→	1世子ども(準1世)	→→	2世	→→	3世
日本語	○		○		○		○
沖縄方言	○		△		△		×
スペイン語	△		○		○		○

2 世においてこのような違いがでてくる要因としては様々なことが考えられるが、白岩ほか（2011）では生活戦術の違いを挙げ、朴ほか（2013）では、日本語学習歴の違いについて指摘した。その概略を以下に示す。

1）日本語が保持されるかどうかの違いは、子ども世代である 2 世に対して、「ブラジル国籍を取得させ、ブラジルの公教育を重視し、高学歴化に基づくブラジル人としての社会的成功をめざす」か、「日本国籍を取得させ、ボリビア人と隔離した日ボ校においてスペイン語と日本語スペイン語による二元的教育をおこない、日本への長期研修（デカセギ）とボリビア人を雇用した大規模農業による経済的成功をめざす」かという生活戦術の違いと相関している。（白岩ほか 2011：29）

2）このような生活戦術の違いには、日本語学習歴の違いが大きく関わっている。ボリビアの方が、学習期間が長く、1週間の学習回数も多い。（朴ほか2013：23）

さらに、今回、両コミュニティの 2 世における言語生活史を分析した結果、就学以前の段階で、家庭での言語使用や近隣の同世代の友人との言語使用が大きく異なっていることが明らかになった。本稿では、2 世の言語生活史の分析を行うとともに、日本語保持に関わる要因について考察する。

本稿の構成は次のとおりである。2 節では言語生活調査の概要について説明する。3 節では、まず、親世代にあたる 1 世の言語生活史（移住当初の言語使用及び現在の言語能力意識）について、成人移民と子ども移民を分けて考察した上で、4 節において、就学以前、初等教育時、中等教育時の順に、2 世の言語生活史（言語使用の変化）について述べる。5

節では、補足として、ビラ・カロン地区において日本語が保持されている 2 世の言語生活史について述べ、最後の 6 節で、本稿のまとめを行う。

2. 言語生活調査について

調査地となっているビラ・カロン地区とオキナワ第一移住地は [1)]、沖縄系移民を中心としたエスニックコミュニティであり、次の表 1 と表 2 に見るように [2)]、いずれも永住を目的とした戦後移民である [3)]（表中の NR は未回答を、「-」は出現数 0 を示す。以下同様。）。

表 1　渡航年代

	カロン		オキ移	
	1 成	1 子	1 成	1 子
1940 年代	1	-	-	-
1950 年代	5	5	14	5
1960 年代	3	5	7	6
NR	-	-	-	1
合計	9	10	21	12

表 2　渡航時予定（1 世成人のみ）

	カロン	オキ移
永住	7	21
一時	1	-
未定	1	-
合計	9	21

本稿も、白岩ほか（2011）、朴ほか（2013）と同様に、ブラジルのビラ・カロン地区とボリビアのオキナワ第一移住地で実施した言語生活調査の分析結果である。（言語生活調査の詳細については、工藤・森ほか（2009）、工藤編（2012）などを参照されたい。）

2.1. 言語生活調査票について

言語生活調査の概要をまとめると、次の表 3 のようになる。

表 3　言語生活調査の概要

調査地点名	ビラ・カロン地区（ブラジル）	オキナワ第一移住地（ボリビア）
調査実施期間 [4)]	2005 年 5 月～9 月	2007 年 7 月、8 月
調査対象者	調査地在住の旧小禄村出身者及びその子弟（ウルクンチュ）	オキナワ日本ボリビア協会の会員で第一移住地に籍を持つ 288 名 [5)]
無作為抽出の基礎データ	字小録・田原字人会名簿に登録された 150 名	第一移住地の会員名簿に登録された 123 名
調査方法	調査票を用いた面接調査	
調査員	調査地在住の青年ウルクンチュ	オキナワ日本ボリビア協会・調査地在住の女性 7 名
調査票回収人数（総計）	87 人	107 名

言語生活調査票は、次の項目で構成されている。このうち、本稿の分析対象は、主に、2

の「個人的属性 2：言語生活史（1 世用／2 世以下用）」である。

表 4　言語生活調査の項目

1	個人的属性 1：社会的属性（全世代共通）	6	日本語・沖縄方言・現地語能力意識
2	個人的属性 2：言語生活史（1 世用／2 世以下用）	7	日本語・沖縄方言教育意識
3	家庭での言語使用	8	訪日経験（デカセギ経験）と言語意識
4	メディア・娯楽と言語使用	9	コロニア語・沖縄方言をめぐる意識
5	職場・地域社会での言語使用		

本稿の分析に用いた言語生活史の項目の詳細は次のとおりである[6)]。

表 5　本稿で用いた分析項目

1 世	「ガイジン」との接触及び使用言語 本土系日系人との接触及び使用言語 ウチナーンチュとの接触及び使用言語 移住前の日本語／沖縄方言／現地語への理解度 移住当初の言語使用（日本語／沖縄方言／現地語） 現地語（ポルトガル語／スペイン語）学習に関する項目
2 世	就学以前／初等教育時／中等教育時にどの言語を使用していたか a. 家庭で（祖父母、両親、兄弟に対して） b. 学校で（日系人の友人、ウチナーンチュの友人、現地人の友人に対して） c. 地域社会で （日系人の友人、ウチナーンチュの友人、現地人の友人に対して（中等教育時のみ））

2.2. 分析対象者について

分析対象者については、白岩ほか（2011）、朴ほか（2013）と同様に、一つの世代を 30 年の範囲に収まるものに限定した。世代の区別は日本政府算定方式に従い、両親の世代が異なる場合、子どもの世代は若い親の方の世代と等しいものとした。つまり、1 世と 2 世の間に生まれた子どもは 2 世となる。また、1 世については、言語形成期を考慮し、暫定的に、渡航時に 13 歳以上であった場合は「成人移民」、12 歳以下であった場合は、「子ども移民」として扱った。本稿の分析の中心となるのは、ビラ・カロン地区の 2 世 36 名と、オキナワ第一移住地の 2 世 52 名である。

表 6　分析対象者の世代別分布

		ビラ・カロン地区	オキナワ第一移住地
1 世	成人	9	21
	子ども	10	12
2 世		**36**	**52**
3 世		13	8
合計		68	93

3. 「1 世」の言語生活史

本節では、2 世の親世代となる 1 世の言語生活史について、1 世成人移民と 1 世子ども移民に分けて述べる。まず、移住当初における言語使用（3.1）について述べ、次に、現在（調査時）における言語能力意識（3.2）について考察する。

3. 1. 移住当初における言語使用

本節では、以下、1）現地語、2）日本語、3）沖縄方言の順に、移住当初の言語使用について述べる。

3.1.1. 「1 世成人移民」の場合

1）移住当初の現地語の使用について

まず、移住当初の「ガイジン」（日系以外のブラジル人及びヨーロッパからの移民に対する日系人側からの呼称）との接触有無を見ると、表 7 のようになる[7]。

表 7　ガイジンとの接触有無（1 世成人）

	カロン	オキ移
あり	5	8
なし	4	13
合計	9	21

ビラ・カロン地区では、接触があった人となかった人の比率が半々ぐらいであるが、オキナワ第一移住地では、接触がなかった人の方が多い。この違いは、移住当初の職業における違いと関わりがあると思われる。「ガイジン」との接触があったと回答した人は、どちらも、主に仕事関係での接触と回答しているが[8]、ビラ・カロン地区の 1 世成人の移住当初の職業は、縫製業（5 名）、農業、植木屋、美容院の見習いなど[9]、多様な形態を見せており、このうち、接触があったと回答した人は、家族労働力に依存した縫製業以外の職業に就いた人である。オキナワ第一移住地の場合、移住当初の職業は主に農業であり、基本的には家族を中心とした労働であったため、「ガイジン」との接触機会は、ビラ・カロン地区に比べると少なかったのだと思われる。

現地語能力については、大きな違いは見られない。表 8 に示すように、「移住前、現地語はどの程度わかったか」への問いに対して、ほとんどの人が「まったくわからなかった」と回答している（オキナワ第一移住地で実施した言語生活調査票では、「話す・聞く」能力と「読む・書く」能力とを分けている。なお、表中の現地語とは、ビラ・カロン地区の場合、ポルトガル語を、オキナワ第一移住地の場合、スペイン語を示す。以下同様である。）移住当初、現地語を使っていた人も少ない。ビラ・カロン地区もオキナワ第一移住地も、そのほとんどが仕事関係で接触していた人であり、使用場面や相手としては、「ブラジル人

と仕事中」（ビラ・カロン地区の回答）[10]、「ボリビア人労働者」「使用人」「従業員」（オキナワ第一移住地の回答）を挙げている。

表 8　移住前の現地語理解度（1 世成人）

	カロン	オキ移	
		話す 聞く	読む 書く
とてもよく	-	-	1[11]
よく	-	-	-
少し	-	5	3
まったく	6	16	17
NR	3	-	-
合計	9	21	

表 9　移住当初の現地語使用の有無（1 世成人）

	カロン	オキ移
あり	3	2
なし	3	16
NR	3	3
合計	9	21

ただし、使用していたとしても、多くがジェスチャーや片言の現地語であったと回答している（表中のカテゴリーは筆者によるものである。なお、「」中の回答は、自由記述の回答から直接引用したものであり、現地語で回答されているものについては日本語訳を掲載する。表 20 についても同様である。）。

表 10　「ガイジン」と接触時に使っていた言語（自由回答）（1 世成人）

カロン	1) ジェスチャー：「身振り手振りで」「手まね」 2) 片言のポルトガル語[12]： 「日ポの訳書を利用してポルトガル語を使っていたが、英語も使った」 「初級ポルトガル語」 3) ポルトガル語：「ポルトガル語」
オキ移	1) ジェスチャー：「身ぶりとことば」「身ぶり」 「いろんな方法、主にジェスチャー」「手ぶりで」 2) 片言のスペイン語：「片言、スペイン語」「片言のスペイン語」 3) その他：「相手が話すスペイン語を聞き、物の名前で話していた」

このように、移住当初の現地語能力はどちらもほぼなかったのであるが、「現地語を習ったか」という問いに対する回答（表 11）においても、「いいえ」と回答する人の方が多く、約 8〜9 割以上が現地語の学習経験がない。一部、学習経験があると回答した人がいるが、独学や仕事による習得であり、学校での学習ではない[13]。

表 11　現地語学習経験の有無（1 世成人）

	カロン	オキ移
あり	2	2
なし	7	19
合計	9	21

2）移住当初の日本語使用について

まず、本土系日系人との接触の有無について述べると、表 12 に示すように、ビラ・カロン地区の場合、接触があったと回答する人とそうでない人とがほぼ同数であり、オキナワ第一移住地に比べて、本土系日系人との接触があったと回答する人が相対的に多く見られる。ビラ・カロン地区には、本土系日系人も混住しており、接触場面が相対的に多かったのだと思われる。

表 12　本土系日系人との接触の有無（1 世成人）

	カロン	オキ移
あり	4	5
なし	5	16
合計	9	21

移住前の日本語への理解度は、どちらのコミュニティにおいても高く、移住当初、日本語を使っていたと回答する人が多い。使用場面については、「いつも」「本土日本人と接触するとき」「友達と休日に」（以上、ビラ・カロン地区に見られた自由回答）、「毎日の生活（3 名）」「日常の会話（2 名）」「集会や会合（2 名）」「日常、家庭（2 名）」「生活のうえで」「つきあい」（以上、オキナワ第一移住地に見られた自由回答）など、ほとんどが日常生活での使用である。

表 13　移住前の日本語理解度（1 世成人）

	カロン	オキ移	
		話す 聞く	読む 書く
とてもよく	4	15	13
よく	3	5	6
少し	1	1	2
まったく	0	-	-
NR	1	-	-
合計	9	21	

表 14　移住当初の日本語使用の有無（1 世成人）

	カロン	オキ移
あり	5	19
なし	2	1
NR	2	1
合計	9	21

3）移住当初の沖縄方言使用について

どちらのコミュニティにおいても、移住前の沖縄方言への理解度は、日本語よりも高い結果となる。使用場面についても、「家族やウチナーンチュと（2 名）」「家族と」「親戚と毎日」「いつも」「友人、会館、仕事」（以上、ビラ・カロン地区に見られた自由回答）、「日常の生活（4 名）」「日常、家庭など」「会合」「つきあい」（以上、オキナワ第一移住地に見られた自由回答）などといった回答であり、日本語と同様に、ほとんどが日常場面における使用である。

表 15　移住前の沖縄方言の理解度（1 世成人）

	カロン	オキ移
とてもよく	8	20
よく	1	-
少し	-	1
まったく	-	-
合計	9	21

表 16　移住当初の沖縄方言使用の有無（1 世成人）

	カロン	オキ移
あり	9	18
なし	-	-
NR	-	3
合計	9	21

3.1.2.　「1 世子ども移民」の場合

本節でも、1 世成人の場合と同様に、1）現地語、2）日本語、3）沖縄方言の順に、1 世子ども移民の言語生活史について述べる。

1）移住当初の現地語使用について

どちらのコミュニティにおいても「ガイジン」との接触がなかった人の方が多い。接触があったとする人は、ビラ・カロン地区では、3 名中 2 名が、オキナワ第一移住地では、5 名中 2 名が「学校で」と回答している[14)]。

表 17　「ガイジン」との接触の有無（1 世子ども）

	カロン	オキ移
あり	3	5
なし	6	7
NR	1	-
合計	10	12

移住前の現地語の理解度に関しては、表 18 に見られるように、1 世成人の場合とほぼ変わらず、未回答を除けば、「まったくわからなかった」という回答となる。移住当初、現地語を使用していたと回答している人は、使用場面について、「友人やいとこと」（ビラ・カロン地区の回答）、「先生や友人」「ボリビア人の友人」「現地人」（オキナワ第一移住地の回答）と回答している。その時に用いていた言語については、片言との回答がある一方で、1 世成人の場合には見られなかった、ポルトガル語やスペイン語との回答も見られる。

表 18　移住前の現地語理解度（1 世子ども）

	カロン	オキ移	
		話す 聞く	読む 書く
とてもよく	-	-	-
よく	-	-	-
少し	-	-	-
まったく	6	7	7
NR	4	5	5
合計	10	12	

表 19　移住当初の現地語使用の有無（1 世子ども）

	カロン	オキ移
あり	1	3
なし	5	2
NR	4	7
合計	10	12

表 20　「ガイジン」との接触時に使っていた言語（自由回答）（1 世子ども）

カロン	1) 片言のポルトガル語：「ブラジル語混じり」 2) ポルトガル語：「ポルトガル語」 3) その他：「日本語／ポルトガル語」
オキ移	1) 片言のスペイン語：「片言のスペイン語」 「片言のスペイン語（本を見ながら）移民の単語集を指さしながら」 2) スペイン語：「半年ほどでスペイン語」 3) その他：「わからない」

1 世子ども移民には、学校での現地語の学習経験を持つ人が見られる。現地語の学習経験がある 1 世成人の場合、独学や仕事による学習であったが、1 世子ども移民では、ほとんどが学校での学習だと回答している[15)]。

表 21　現地語学習経験の有無（1 世子ども）

	カロン	オキ移
あり	5	2
なし	5	5
NR	-	5
合計	10	12

2）移住当初の日本語使用について

移住当初の本土系日系人との接触の有無については、1 世成人と同様に、ビラ・カロン地区では接触があった人となかった人が半々ぐらいであるが、オキナワ第一移住地の場合、接触がなかったとする人の方が多い[16)]。

表 22　本土系日系人との接触の有無（1 世子ども）

	カロン	オキ移
あり	4	2
なし	5	8
NR	1	2
合計	10	12

移住前の日本語の理解度に関しては、1 世成人と同じく、「とてもよく」理解していたと回答する人の方が多い。未回答及び「まったく」理解できなかったと回答した人は、就学以前に移住している人である。

表 23　移住前の日本語理解度（1 世子ども）

	カロン	オキ移	
		話す 聞く	読む 書く
とてもよく	5	5	5
よく	-	-	-
少し	2	1	-
まったく	-	1	2
NR	3	5	5
合計	10	12	

表 24　移住当初の日本語使用の有無（1 世子ども）

	カロン	オキ移
あり	9	6
なし	1	2
NR	-	4
合計	10	12

3）移住当初の沖縄方言使用について

1 世子どもの移住前の沖縄方言への理解度は、1 世成人に比べると低くなる。移住当初の沖縄方言の使用の有無に関しては、日本語と同様に、ほとんどが使用していたと回答している。使用場面は、どちらのコミュニティも、家族や友人が相手の場面である。

表 25　移住前の沖縄方言理解度（1 世子ども）

	カロン	オキ移
とてもよく	4	4
よく	3	-
少し	1	2
まったく	-	1
NR	2	5
合計	10	12

表 26　移住当初の沖縄方言使用の有無（1 世子ども）

	カロン	オキ移
あり	9	7
なし	1	1
NR	-	4
合計	10	12

以上、1 世の移住当初の言語使用について、1 世成人と 1 世子どもに分けて述べた。移住当初における「ガイジン」や本土系日系人との接触の有無については、両コミュニティ間に違いが見られる。また、現地語の学習経験の有無においても、1 世成人と 1 世子どもとの間に違いが見られる。この点を除くと、現地語、日本語、沖縄方言の使用において、両コミュニティ間に違いは見られない。現在（調査時）における言語能力意識については図 1 に示したが、次節で、より詳細に見ていくこととする。

3. 2. 現在（調査時）における言語能力意識

両コミュニティにおける現在（調査時）の言語能力意識については、2 世を中心に白岩ほか（2011）で分析を行ったが、本稿では、その補足として、1 世の言語能力意識について述べる。

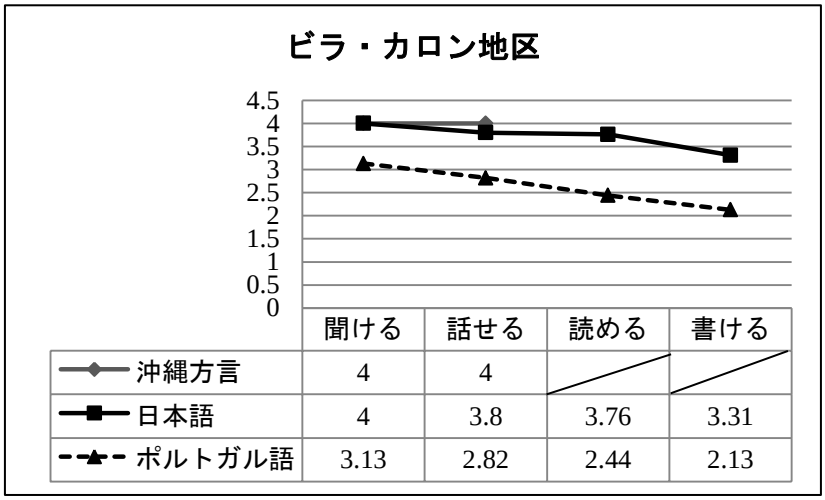
3.2.1. 「1 世成人移民」の場合

1 世成人の言語能力意識について、言語別（沖縄方言、日本語、現地語（ポルトガル語／スペイン語））及び技能別（聞ける、話せる、読める、書ける）に、全体の平均値を出すと次の図 2 のようになる [17)]。図中の数値は、4 が「よくできる」、3 が「だいたいできる」、2 が「少ししかできない」、1 が「まったくできない」である。

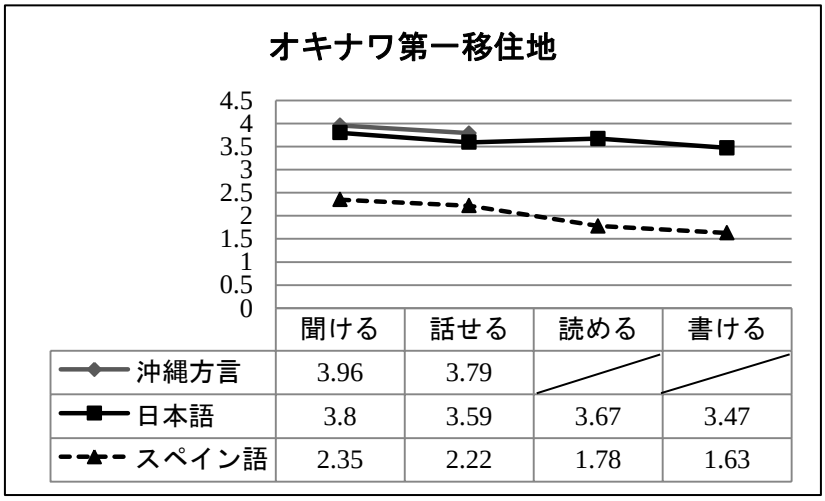
1 世成人の場合、沖縄方言と日本語に対する自己評価は高く、現地語であるポルトガル語、スペイン語に対する自己評価は低い。技能別では、日本語、現地語ともに、聞く能力や話す能力に比べ、読む能力や書く能力は自己評価が低くなる。このように、全体的な傾

向としては、両コミュニティ間に違いは見られないのであるが、その数値に注目すると、ビラ・カロン地区の 1 世成人の方が、オキナワ第一移住地の 1 世成人よりも、現地語の能力意識が高くなっている。ビラ・カロン地区では、「聞ける」「話せる」に関する自己評価は 3（だいたいできる）前後であるのに対し、オキナワ第一移住地では 2.5 以下となる。これは、ビラ・カロン地区の「読める」に関する自己評価よりも低い。「読める」「書ける」になると、自己評価はさらに低くなり、2 以下となってしまう。3 節で示したように、1 世成人の移住当初の現地語への理解度や学習経験の有無においては、両コミュニティ間に似通ったものがあったが、現在（調査時）の現地語能力意識には差がでているのである。

図 2　言語能力意識（1 世成人）



	聞ける	話せる	読める	書ける
沖縄方言	4	4		
日本語	4	3.8	3.76	3.31
ポルトガル語	3.13	2.82	2.44	2.13

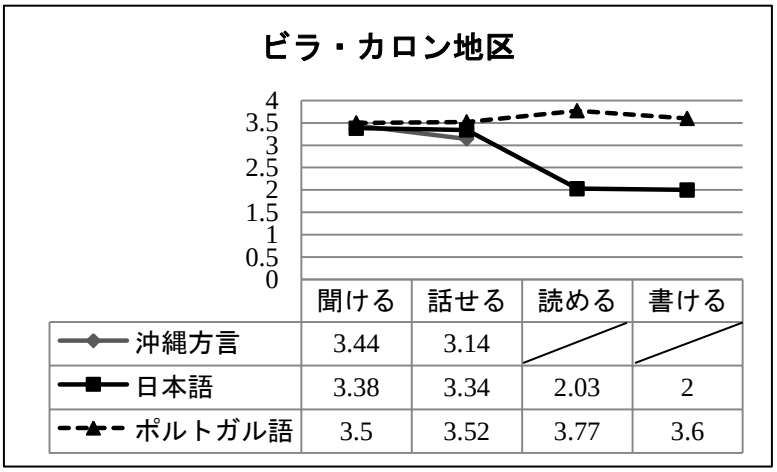


	聞ける	話せる	読める	書ける
沖縄方言	3.96	3.79		
日本語	3.8	3.59	3.67	3.47
スペイン語	2.35	2.22	1.78	1.63

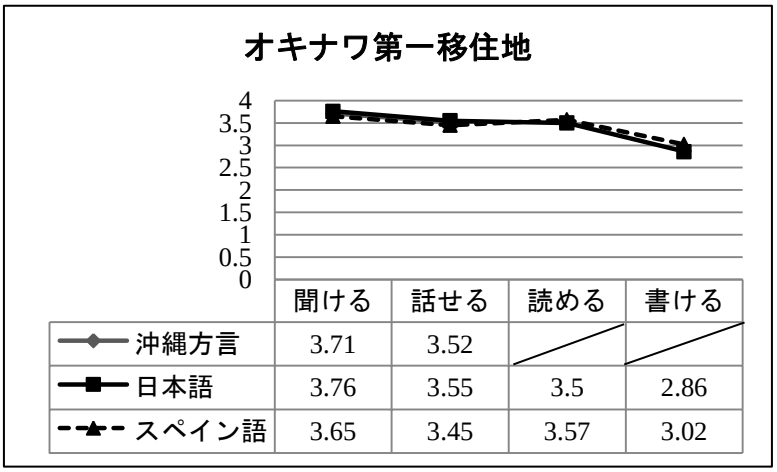
3.2.2. 「1 世子ども移民」の場合

図 3 は、1 世子どもの言語能力意識を技能別に示したものである。1 世子どもになると、どちらのコミュニティでも、現地語の能力意識が高くなっていることが分かる。そして、ビラ・カロン地区の 1 世子どもの方が、オキナワ第一移住地の 1 世子どもよりも、「読める」「書ける」に対する自己評価が高い。

図 3　言語能力意識（1 世子ども）



	聞ける	話せる	読める	書ける
沖縄方言	3.44	3.14		
日本語	3.38	3.34	2.03	2
ポルトガル語	3.5	3.52	3.77	3.6



	聞ける	話せる	読める	書ける
沖縄方言	3.71	3.52		
日本語	3.76	3.55	3.5	2.86
スペイン語	3.65	3.45	3.57	3.02

日本語については、オキナワ第一移住地の 1 世子どもの場合、1 世成人の自己評価とそれほど変わらないのであるが、ビラ・カロン地区の 1 世子どもの場合、1 世成人よりも自己評価が低くなっている。「読める」「書ける」になると、さらに顕著になり、ほぼ 2（少ししかできない）になる。オキナワ第一移住地の 1 世子どもにおいても、「書ける」に関しては、1 世成人に比べて自己評価が低くなる傾向にあるが、「読める」への自己評価は 3.5

となり、1 世成人とあまり変わらない。

以上、1 世成人移民と子ども移民に分け、移住当初の言語使用と現在（調査時）の言語能力意識について述べてきた。両コミュニティ間に大きな差は見られないものの、その詳細まで見ていくと、1 世子ども移民では、ビラ・カロン地区とオキナワ第一移住地との間に違いがでてきている。とくに「読み書き」能力については、ビラ・カロン地区の 1 世子ども移民の方が、日本語能力に対する自己評価が相対的に低くなってきていると同時に、ポルトガル語能力に対する自己評価は高くなっている。これは、次節で考察する 2 世の言語能力意識に見られる違いと共通している。

4. 「2 世」の言語生活史

1 世の子ども移民において、すでに、両コミュニティ間における日本語保持の違いが生じ始めているのであるが、大きな変化が起こるのは、2 世である。では、両コミュニティにおけるこの違いは、2 世の言語生活史の中で「いつ、どのように」起こっているのであろうか。結論から先取りしていうと、「就学以前」に違いがでてきている。そして、祖父母や親世代との言語使用の方が、兄弟や友人との言語使用よりも日本語が保持される。とくに、祖父母に対しては、日本語が保持される傾向が強い。本節では、2 世の言語生活史について、1）就学以前、初等教育時、中等教育時に分け、2）上の世代（祖父母・両親）と同世代（兄弟・友人）のそれぞれに対してどのような言語使用をしてきたのかについて分析する。

4.1. 就学以前の言語使用

就学以前については、「家庭内」「友人間」に分けて調査を行った。表 27 に示すように、ビラ・カロン地区の場合、「家庭内」「友人間」ともに最も多い回答は、未回答を除けば、「主にポルトガル語」である（表中では、「沖縄方言」を「方言」に、「日本語」を「日語」に、「ポルトガル語（スペイン語）」を「ポ語（ス語）」に略して表記する。以下同様である。）。「家庭内」の場合、「主に日本語」や日本語や沖縄方言を交えたポルトガル語使用といった回答も見られるが、これは、次の「初等教育時」の回答から判断して、家庭内での上の世代との使用言語を想定した回答である可能性がある。「友人間」となると、回答者のうち、「主に日本語」「日本語ポルトガル語半々」と回答した 3 名を除けば、全員が「主にポルトガル語」と回答しており [18)]、ポルトガル語へのモノリンガル化は、就学以前から始まっていることが分かる。一方、オキナワ第一移住地では、「家庭内」「友人間」ともに過半数の

人が「主に日本語」と回答している。

表 27　就学以前における言語使用

	カロン		オキ移	
	家庭内	友人間	家庭内	友人間
主に方言	-	-	-	-
方言日語半々	-	-	9	-
主に日語	3	2	26	27
日語ポ語半々	4	1	12	17
主にポ語	8	25	1	3
三言語併用	6	-	4	2
方言ポ語半々	7	-	-	-
NR	8	8	-	3
合計	36		52	

4.2. 初等教育時及び中等教育時の言語使用

4.2.1. 上の世代との言語使用

ビラ・カロン地区のポルトガル語へのモノリンガル化は、就学以前から始まっているのだが、その程度は相手によって異なり、初等教育時においては、上の世代である祖父母や両親に対しては、日本語、または、日本語を交えた言語使用（「日本語ポルトガル語半々」「三言語併用」）であったと回答する人も少なからず見られる。とくに、「対祖父母」の場合、約 85%がこのような回答となる[19)]。「対両親」になると、最も多い回答は「主にポルトガル語」になるが、日本語、または日本語や沖縄方言を交えた言語使用を合わせた数も、約 39%になり、上の世代に対しては日本語使用を保持している 2 世が見られる。

表 28　初等・中等教育時の上の世代との言語使用（ビラ・カロン地区）

	初等教育時		中等教育時	
	対祖父母	対両親	対祖父母	対両親
主に方言	3	-	2	-
方言日語半々	-	-	-	-
主に日語	6	3	3	2
日語ポ語半々	6	3	3	2
主にポ語	4	17	11	20
三言語併用	7	4	6	3
方言ポ語半々	1	1	-	1
NR	9	8	11	8
合計	36			

しかし、上の表 28 に見るように、中等教育時になると、「対祖父母」、「対両親」ともに、最も多い回答は「主にポルトガル語」となる（「対祖父母」：44%、「対両親」：約 71%）。

ただし、「対祖父母」の場合、「主に日本語」、「主に沖縄方言」、または、日本語や沖縄方言を交えたポルトガル語との回答を合わせた数も 56%となり、中等教育時においても、日本語や沖縄方言の使用を保持している 2 世がいなくなってしまうわけではない。

一方、ボリビアのオキナワ第一移住地では、初等教育時では、「対祖父母」か「対両親」かに関わらず、「主に日本語」との回答率が最も高い。「対祖父母」の場合、未回答を除くと、「主に日本語」か「沖縄方言日本語半々」であり、現地語の使用は見られない。「対両親」の場合も、「主にスペイン語」と回答した人は 1 人のみである。

中学課程になっても、最も多い回答は「主に日本語」である。ただし、両親に対しては、スペイン語を交えた日本語使用である「日本語とスペイン語半々」という回答率が上がる（12%→20%）。祖父母に対しては、初等教育時と同じく、無回答を除くすべての人が「主に日本語」または「沖縄方言日本語半々」と回答している。

ボリビアの場合、高校課程に進学するには、移住地外へと行かなければならない。スペイン語と日本語の二元教育からスペイン語だけの教育になるのであるが、そのような高校課程に進んでも、祖父母、両親に対しては、「主に日本語」を用いるとの回答が上位を占めている。

表 29　初等・中等教育時の上の世代との言語使用（オキナワ第一移住地）

	初等教育時		中等教育時			
			中学課程		高校課程	
	対祖父母	対両親	対祖父母	対両親	対祖父母	対両親
主に方言	-	-	-	-	-	-
方言日語半々	3	4	5	2	3	5
主に日語	24	39	24	37	19	31
日語ス語半々	-	6	-	10	-	9
主にス語	-	1	-	1	1	2
三言語併用	-	-	-	-	-	1
方言ス語半々	-	-	-	-	-	-
NR	25	1	23	2	29	4
その他	-	1[20)]	-	-	-	-
合計	52					

4.2.2. 同世代との言語使用

ビラ・カロン地区では、初等教育時に、同世代の兄弟に対しては、「主に日本語」と答えた 1 名を除いて、回答者全員が「主にポルトガル語」を使用しており、就学以前と同様に、ポルトガル語へとシフトしている人が多い。友人に対しても、現地人の友人はもちろんのこと、日系人やウチナーンチュの友人に対しても、「主にポルトガル語」を使用すると回答

している人が最も多く見られる。

表 30　初等教育時の同世代との言語使用（ビラ・カロン地区）

	対兄弟	対友人		
		日系人	ウチナーンチュ	現地人
主に方言	-	-	-	-
方言日語半々	-	-	-	-
主に日語	1	1	1	-
日語ポ語半々	-	-	1	-
主にポ語	27	27	25	27
三言語併用	-	-	1	-
方言ポ語半々	-	-	-	-
NR	8	8	8	9
合計	36			

同世代に対する言語使用の傾向は、中等教育時になっても変わらない。また、地域社会、つまり、学校外でも、友人とは、日系、非日系に関わらず、「主にポルトガル語」を使用すると回答している。

表 31　中等教育時の同世代との言語使用（ビラ・カロン地区）

	対兄弟	対日系人の友人		対ウチナーンチュの友人		対現地人の友人	
		学校	地域	学校	地域	学校	地域
主に方言	-	-	-	-	-	-	-
方言日語半々	-	-	-	-	-	-	-
主に日語	1	1	1	1	1	-	-
日語ポ語半々	-	-	1	-	1	-	1
主にポ語	27	27	25	26	25	27	26
三言語併用	-	-	1	1	1	-	-
方言ポ語半々	-	-	-	-	-	-	-
NR	8	8	8	8	8	9	9
合計	36						

一方、オキナワ第一移住地では、ビラ・カロン地区とは大きく異なり、同世代に対しても、「主に日本語」との回答が最も多い。「対兄弟」になると、両親に対しては 2%しか見られなかった「主にスペイン語」との回答率が 20%へと上がってくるが、ビラ・カロン地区に比べると、その率ははるかに低いものである。「対友人」では、「対兄弟」よりも、「主にスペイン語」との回答率が少し上がるが（「対日系人の友人」: 約 26%、「対ウチナーンチュの友人」: 25%）、「主に日本語」との回答も見られ（「対日系人の友人」: 約 24%、「対ウチナーンチュの友人」: 約 38%）、日本語の使用も保持されている。なお、現地人の友人

に対しては、ビラ・カロン地区と同様に、主に、現地語であるスペイン語を使用している。

表 32　初等教育時の同世代との言語使用（オキナワ第一移住地）

	対兄弟	対友人		
		日系人	ウチナーンチュ	現地人
主に方言	-	-	1	-
方言日語半々	1	-	-	-
主に日語	25	8	15	1
日語ス語半々	14	16	14	1
主にス語	10	9	10	46
三言語併用	-	1	-	-
方言ス語半々	-	-	-	-
NR	2	18	12	4
合計	52			

中学課程になると、「対兄弟」の場合、「日本語とスペイン語半々」との回答率が上がるが（28%→約 35%）、最も多い回答は「主に日本語」である。また、「対友人」への言語使用の傾向を見ると、「主に日本語」との回答が減り、「日本語スペイン語半々」、「主にスペイン語」が若干増えるが、それぞれ 1～3 人程度の変動であり、大きな変化は見られない。また、スペイン語を使用していても、ビラ・カロン地区とは違って、日本語を交えたスペイン語の使用、つまり、「日本語スペイン語半々」が最も多い回答である（「対日系人の友人」: 約 52%、「対ウチナーンチュの友人」: 約 41%）。ウチナーンチュの友人に対しては、約 32%が「主に日本語」を使用すると回答している。

表 33　中学課程における同世代との言語使用（オキナワ第一移住地）

	対兄弟	対日系人の友人		対ウチナーンチュの友人		対現地人の友人	
		学校	地域	学校	地域	学校	地域
主に方言	-	-	-	-	-	-	-
方言日語半々	1	-	-	-	-	-	-
主に日語	19	5	4	13	10	-	1
日語ス語半々	17	16	23	17	28	2	1
主にス語	11	10	11	11	10	43	45
三言語併用	-	-	-	-	-	-	-
方言ス語半々	-	-	-	-	-	-	-
NR	4	21	14	11	4	7	5
合計	52						

高校課程になると、兄弟の間では「日本語とスペイン語半々」との回答が約 47%となり、

さらに上がってくるが、「主に現地語」という回答率はほぼ変わらず、程度差はあるものの、日本語使用が保持されていることが分かる。また、友人に対しては、ウチナーンチュの友人が相手であっても、「主に日本語」との回答が、約 32%から約 20%へと減少し、「日本語スペイン語半々」との回答が、約 41%から約 56%へと増加する。しかし、「主にスペイン語」との回答率はほぼ変わらず、高校課程になってより現地語を交えるようにはなっても、スペイン語のみを使用するという人は少ないことが分かる。

表 34　高校課程における同世代との言語使用（オキナワ第一移住地）

	対兄弟	対日系人の友人		対ウチナーンチュの友人		対現地人の友人	
		学校	地域	学校	地域	学校	地域
主に方言	-	-	-	-	-	-	-
方言日語半々	1	-	-	-	-	-	-
主に日語	12	7	4	8	8	-	-
日語ス語半々	22	20	23	23	28	-	-
主にス語	12	9	10	10	11	46	47
三言語併用	-	-	-	-	-	-	-
方言ス語半々	-	-	-	-	-	-	-
NR	5	16	15	11	5	6	5
合計	52						

2 世の言語生活史についてまとめると、次のようになる。

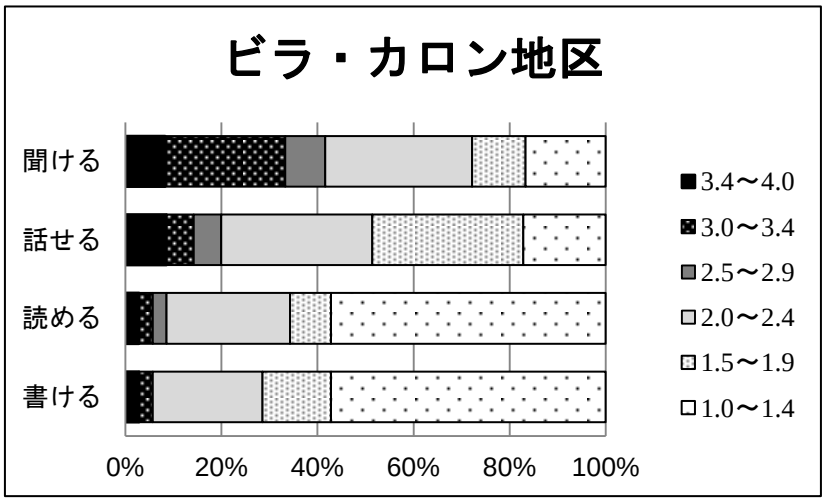
オキナワ第一移住地の 2 世では、上の世代か同世代かを問わず、就学以前から日本語の使用が保持されている。これに対して、ビラ・カロン地区の 2 世は、就学以前から、主にポルトガル語を使用している。これは同世代間の会話において顕著であり、未回答を除いたほぼすべての人が、就学以前から、主にポルトガル語を使用している。一方、上の世代、とくに祖父母に対しては、日本語（または、沖縄方言）使用、または、ポルトガル語使用であっても、日本語や沖縄方言を交えるといった 2 世が存在する。しかし、これは基本的に、初等教育時までであり、中等教育時以降は、主にポルトガル語使用となる。

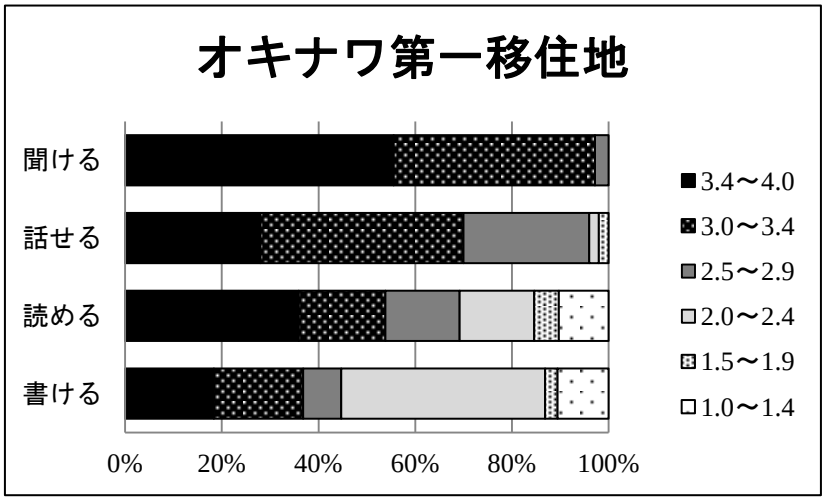
5. ビラ・カロン地区の 2 世に見られる日本語保持のバリエーション

オキナワ第一移住地の 2 世は、調査対象者のすべての人が、スペイン語と日本語を使用するバイリンガルであった。一方、ビラ・カロン地区では、多くの 2 世がポルトガル語へとモノリンガル化している中、成人になった現在（調査時）でも、日本語能力に対する自己評価が高い 2 世が存在している。日本語能力意識に関する項目（表 4 の項目 6 に相当）

への回答には、次のようなばらつきがある。図 4 は、2 世の回答を技能別に平均値を出し、その分布を示したものである（「4」が「よくできる」、「3」が「だいたいできる」、「2」が「少ししかできない」、「1」が「まったくできない」である。なお、未回答及び複数回答が含まれている 2 世については除外した[21)]。）。

図 4　2 世の日本語能力意識





「聞ける」「話せる」（つまり、話し言葉）に注目すると、図 4 に示すように、オキナワ第一移住地の 2 世の場合、ほぼ全員が 2.5 以上の自己評価となる。ビラ・カロン地区の 2 世になると、オキナワ第一移住地の 2 世に比べ、自己評価は下がるが、「聞ける」については約 40%が、「話せる」については 20%が、2.5 以上の自己評価を示している。話し言葉における 2 世の日本語保持にはバリエーションが見られるのである。

本節では、「話し言葉」の能力を中心に、ポルトガル語能力も高く日本語能力も高い 2 世について分析を行い、日本語能力の保持に関わる要因について考える。聞く能力と話す能力について自己評価の平均値が高い上位 6 名を挙げると次のようになる。(表中の話者記号「BR2M23−67」は、Brazil（ブラジル）2（世）Male（男性）23（調査時の年齢）−67（通し番号)）を表す。)

表 35　日本語能力（話し言葉）が保持されているビラ・カロン地区の 2 世の詳細

	話者記号	性別	年齢	出生年	国籍	職業	平均値
1	BR2M23−67	M	23	1982	ブラジル	プログラマー	3.8
2	BR2F30−53	F	30	1975	ブラジル	行政補佐官	3.7
3	BR2M27−25	M	27	1978	ブラジル	商業	3.2
4	BR2F25−66	F	25	1980	ブラジル	服飾関係・スタイリスト	3.2
5	BR2F43−54	F	43	1962	ブラジル	商業	3.0
6	BR2F27−26	F	27	1978	ブラジル	商業	2.9

以下、上の表に挙げた 2 世について、平均値の高い順に言語生活史について述べ、日本語能力の保持に関わる要因について考察していく。

1) BR2M23−67 さんの場合

BR2M23−67 さんは、1982 年生まれの 2 世である。現在の同居人である祖父母と両親との会話は、主に日本語を使用している。祖父母とは、話かける場合も話しかけられる場合も、日本語のみを使用している。1 世である父親との使用言語も日本語の方が多く、2 世の母親とは、話しかけられる場合は「日本語とポルトガル語半々」であるが、話しかける場合は日本語の方が多い。兄弟とはポルトガル語のみの使用であるが、家族全員が揃うときは、日本語の方が多いという。

NHK や日本のビデオをときどき視聴し、日本の歌もポップスを中心によく聴いている。

日本語学習への意欲も高く、「世界や日本の現状を知りたいから」「日系人としての先祖の言葉を受け継ぐため」「文化に興味があるから」といった理由で、今後、日本語を学習したいと回答している。本人が希望するなら、自身の子どもにも日本語を習わせたいと思っており、「日系人として言葉を知っておくのは当然」「もっと文化を理解するため」といった理由を挙げている。その一方で、日系の若い世代全員が日本語を学ぶのは必ずしも必要ではないと考えており、日系人なら日本語が話せるのは当然だという意見にも賛成はしていない。その理由としては、「ブラジルに住んでいるのだから」と回答している。

BR2M23−67 さんの場合、子どものころからの使用言語、日本語学習歴、訪日経験につ

いては未回答であったため、これらとの相関関係を見出すことはできないのであるが、家庭内における祖父母と両親との使用言語が主に日本語であるという点が、現在の日本語能力の保持につながっていると思われる。

2) BR2F30−53 さんの場合

BR2F30−53 さんは、1975 年生まれの 2 世である。BR2F30−53 さんの日本語能力意識の高さは、デカセギ経験に起因していると考えられる。日本で 3 年半間デカセギをしており、そのときに日本語を学習したという。それ以前の日本語学習歴は、1 カ月間、週に 1 回 2 時間ずつ日本語学校に通っていただけである。

子どものころから、家庭内外を問わず、ポルトガル語が中心の生活を送っており、現在の言語使用状況も、同居人である兄弟、子どもとは、ポルトガル語のみの使用である。同居はしていないが、父と母から話しかけられる場合は、「日本語と沖縄方言半々」であることが多いとしているが、話しかけるときは、両親に対してもポルトガル語のみを用いている。日本の歌は、ポップスや演歌を中心によく聴いているようであるが、NHK、日本のビデオ、新聞などにはあまり触れていない。

一方、自身の子どもには日本語をぜひ習わせたいと思っており、その理由としては、「世界や日本の現状を知りたいから」「日系人として言葉を知っておくのは当然」「もっと文化を理解するため」といった 3 つの点を挙げている。また、「両親や祖父母と共生するため」に、日系人なら日本語が話せるのは当然だという意見に賛成している。日本語に対する規範意識も強く、日本語、沖縄方言、ポルトガル語を混ぜて使うことについては、「おかしいし、教養がない」と思っている。

以上のことから、BR2F30−53 さんの日本語能力に対する自己評価の高さには、デカセギ経験が最も影響しており、日本語への強い継承意識と規範意識も働いているのではないかと思われる。

3) BR2M27−25 さんの場合

BR2M27−25 さんは、1978 年生まれの 2 世である。BR2M27−25 さんも、BR2F30−53 さんと同様に、2 年間のデカセギ経験があるだけでなく、デカセギ以前に 3 年間、週に 3 回、1 時間ずつ日本語学校に通っていた。

就学以前は、家庭内、友人間ともに日本語の方が多かったという。初等教育時は、兄弟に対してはポルトガル語を使っていたが、祖父母や両親に対しては、日本語を用いていたと回答している。中等教育時には、両親に対してはポルトガル語を用いるようになったが、

祖父母に対しては、「日本語とポルトガル語半々」であったと回答しており、4 節で示したように、ほとんどの 2 世がポルトガル語へとシフトしている中等教育時においても、日本語使用を保持していたことになる。これは大学課程になっても変わらなかった。現在、祖父母、両親、兄弟と同居しているが、ポルトガル語のみを使用するという兄弟を除いては、日本語を使用している。祖父母とは、話しかける場合はポルトガル語を交えた日本語だが、話しかけられる場合は日本語の方が多いという。1 世である父親とは、話しかけるときも話しかけられるときも「日本語ポルトガル語半々」であり、2 世である母親とは、話しかけられる場合は、父親の場合と同様に、「日本語ポルトガル語半々」であるが、自分から話しかけるときは、日本語の方が多いと回答している。

また、現在、商業を営んでいるが、仕事中でも、少しだけではあるが、両親相手に日本語を話すことがあるという。具体的な場面については言及していないが、自営業の場合、ブラジル人の授業員を雇っていることが多く、プライベートなことなどについては、日本語で話すといった場面がよく観察されている。NHK や日本のビデオはときどき視聴し、日本語の新聞はたまに読むという。

自身の子どもにはぜひ日本語を習わせたいと考えており、その理由としては、BR2F30−53 さんと同じく、「世界や日本の現状を知りたいから」「日系人として言葉を知っておくのは当然」「もっと文化を理解するため」の 3 つを挙げている。また、日系の若い世代が日本語を学ぶのは必要だ、日系人なら日本語が話せて当然だと思っており、その理由については、BR2F30−53 さんと同様に、「両親や祖先と共生するため」を挙げている。

以上のことから、BR2M27−25 さんの現在の日本語能力が高い要因としては、デカセギ経験と、子どものころからの日本語使用及び現在の家庭内における日本語使用が考えられる。日本語に対する強い継承意識も影響しているだろう。

4) BR2F25−66 さんの場合

BR2F25−66 さんは、1980 年生まれの 2 世である。BR2F25−66 さんは、日本語学校には、3 年間、週に 5 回、毎日 1 時間ずつ通っていたという。週に 5 回という回数は、ビラ・カロン地区のほかの 2 世の平均からすると多い方である [22)]。成人後も、「沖縄に旅行したいため」、6 か月間、文協で日本語を学んだ経験がある。

子どものころから、ポルトガル語を主に使用してきたが、祖父母に対しては、初等教育時からずっと日本語や沖縄方言を交えたポルトガル語を使用しており、現在も変わらない。そして、祖母から話しかけられるときは、「日本語と沖縄方言半々」であるという。親戚の集まりにおいても、大学課程からは、日本語、沖縄方言、ポルトガル語の 3 言語併用であ

り、家族全員が揃うときも、この 3 つを併用している。仕事上、日本語を話すこともあるという。

日本のビデオをよく見ており、時代劇、ドキュメンタリー、ドラマ、コメディーなど、さまざまなジャンルの番組が好きである。

「日系人として祖先の言葉を受け継ぐため」、日本語の学習を希望しており、自身の子どもにもぜひ日本語を習わせたいという。その理由としては、「日系人として言葉を知っておくのは当然」「もっと文化を理解するため」という 2 点を挙げている。一方、日系の若い世代が日本語を学ぶのは本人が希望するか否かによるとし、日系人なら日本語が話せるのは当然だという意見には賛成していない。日本語、沖縄方言、ポルトガル語を混ぜて使うことには抵抗がなく、「あらゆる年齢、世代の人とコミュニケーションするために必要」だと考えている。

以上のことから、BR2F25−66 さんの日本語の保持には、祖父母との会話における日本語の使用や日本語学習歴、そして、日本語学習への関心の高さや継承意識などが複合的に影響していることが考えられる。

5) BR2F43−54 さんの場合

BR2F43−54 さんは、就学以前から、家庭内における使用言語は、日本語、沖縄方言、ポルトガル語の併用であったという。沖縄系の友人に対しても、子どものころからこの 3 言語を使用してきている。現在の家庭内においては、同居の姑に話しかけられるときは、「日本語と沖縄方言半々」であり、話しかけるときは、日本語だけを使っている。子どもに対してはポルトガル語を使うが、2 世の夫に対しては、日本語を交えたポルトガル語を使う。商業を営んでおり、仕事上、日本語を話すと回答している。

BR2F43−54 さんも、日本語を学びたいと思っており、その理由として「世界や日本の現状を知りたいから」「日系人として祖先の言葉を受け継ぐため」「文化に興味があるから」「家族とコミュニケーションするため」の 4 点を挙げる。自身の子どもにも日本語をぜひ習わせたいと思っており、「世界や日本の現状を知りたいから」「日系人として言葉を知っておくのは当然」「もっと文化を理解するため」を理由として挙げている。ブラジルに住んでいるのだから、「日系人なら日本語が話せるのは当然だ」という意見には賛成しないが、日系の若い世代が日本語を学ぶことは必要だと考えている。

日本への関心が高く、観光や親戚訪問で 4 回も訪日している。NHK をよく見ており、日本の歌も沖縄のものを中心によく聴いているという。日本語学習歴は、数か月間、週に 1 回、1 時間ずつと短いのであるが、成人後、「興味があったため」、数か月間、再び日本語

を学んだ経験もある。

以上のことから、BR2F43−54 さんの日本語能力意識の高さには、子どものころからの上の世代に対する日本語使用と現在の家庭内における日本語使用、そして、日本語や日本への高い関心が影響を与えていると思われる。

6) BR2F27−26 さんの場合

BR2F27−26 さんは、1978 年生まれの 2 世である。日本語学習歴が、4 年間、週に 5 回、1 日 6 時間ずつと長く、ほかの 2 世の日本語学習の通学期間及び回数の平均をはるかに上回っている。

就学以前の家庭内では、日本語、沖縄方言、ポルトガル語を使っていたが、就学後は、ポルトガル語中心になった。現在、家族全員が揃うときの使用言語も、ポルトガル語の方が多いという。ただし、夫に対してはポルトガル語のみの使用であっても、子どもに対しては、日本語、沖縄方言、ポルトガル語を併用しているという。同居はしていないが、祖父母に対しては、話しかける場合も話しかけられる場合も「日本語と沖縄方言半々」であり、2 世の父親と 1 世の母親から話しかけられるときは三言語併用であるという。母には、話しかけるときも日本語を交えたポルトガル語使用である。商業を営んでおり、仕事上、両親や親しい人と日本語を話すことがある。両親とプライベートなことを話したいときは、日本語を使用するという。

NHK をよく視聴しており、日系ラジオもよく聴き、日本語の新聞もよく読んでいる。日本の歌もポップスを中心によく聴いている。

日本語を習いたいと思っており、「就職につながるから」「日系人として祖先の言葉を受け継ぐため」「文化に興味があるから」といった理由を挙げている。「世界や日本の現状を知りたいから」「もっと文化を理解するため」といった理由で、自身の子どもにもぜひ習わせたいと思っている。日系の若い世代が日本語を学ぶのは必要だ、「日系人として文化を知る必要があるため」、日系人なら日本語を話せるのは当然だという意見にも賛成している。自分自身も含めて、日本語、沖縄方言、ポルトガル語を混ぜて使うことがあるが、これは非常によくないと考えている。

このように、BR2F27−26 さんは、日本語学習歴が長く、現在も日本語を使う。日本語学習への意欲もあり、継承意識、規範意識ともに高い。

以上の 6 人の言語生活史から、日本語能力意識の高い人に見られる特徴を見出すと、次のようになる（表中の NR は未回答を表す。）。

表 36　日本語能力意識の高い人に見られる特徴

		家庭内における日本語使用		デカセギ	日本語学習歴	日本への関心（メディア含む）	日本語継承意識
		現在	子どもの頃				
1	BR2M23−67	◎	NR	×	NR	△	○
2	BR2F30−53	×	×	◎	△	×	◎
3	BR2M27−25	○	○	◎	○	△	◎
4	BR2F25−66	△	△	×	◎	◎	○
5	BR2F43−54	△	△	×	△	◎	○
6	BR2F27−26	△	×	×	◎	◎	◎

※◎：とてもある、○：だいたいある、△：少しある、×：ほぼない（または、まったくない）

第 1 に、家庭内において日本語の使用が見られる。現在、家庭内において日本語を使用している 2 世は、子どものころから、上の世代とは日本語を使用していることが多い。

第 2 に、デカセギ経験がある。デカセギに行ったからといって、家庭内の言語が日本語になるわけではないが、デカセギ経験が影響することはありうる。

第 3 に、日本語学習歴の長さである。長い間日本語学校へ通っていた 2 世は日本語能力意識が高い。ただし、日本語学習歴が長いということだけで日本語が保持されるわけではない。

第 4 に、日本への関心である。日本のメディア等によく触れていたり、日本への関心から、成人後、日本語を再び学んでいたりする人は、日本語能力意識が高い。

第 5 に、日本語に対する継承意識である。継承意識の高さが、日本語能力意識の高さに直接つながるわけではないが、日本語能力意識が高い 2 世は、少なくとも自身の子どもについては、日本語を習わせたいという希望を 6 人全員が有している。

以上述べた、日本語能力意識の高い 2 世に見られる特徴は、日本語が保持されているオキナワ第一移住地の 2 世に見られる特徴である。日本語能力が保持されているオキナワ第一移住地の 2 世は、家庭内での日本語使用が多いことはもちろん、デカセギ経験を持つ人が多く、日本語学習歴も長い。日本への関心も高く、NHK や日本のビデオを視聴している人が多い[23)]。また、日本語の継承意識も高い[24)]。

ビラ・カロン地区の日本語能力が保持されている 2 世の場合、オキナワ第一移住地の 2 世のように、すべての特徴が揃っているわけではないが、上に述べた要因のうち、いくつかが備わっていれば、日本語能力が保持されやすく、日本語とポルトガル語のバイリンガルとなりやすいと思われる。

6. おわりに

本稿では、白岩ほか（2011）、朴ほか（2013）の分析結果を踏まえて、ブラジルのビラ・カロン地区とボリビアのオキナワ第一移住地で実施した言語生活調査の分析を進めた。以上をまとめると次のようになる。日本語と現地語に焦点を当てて述べる。

1）1 世における移住当初の言語使用においては、日本語（及び沖縄方言）使用が中心であり、両コミュニティ間に違いは見られない。ただし、ビラ・カロン地区では、現地語であるポルトガル語の使用が高まっていき、1 世子ども移民において、すでに、日本語能力に対する自己評価（とくに「読み書き」能力意識）が低くなってきている。

2）2 世になると、両コミュニティ間で、言語使用や言語能力意識に大きな違いがでてくるのであるが、就学以前においてすでに次のような違いが形成されている。（就学以前については、祖父母、両親、兄弟といった区別をした調査項目にはなっていない。）

表 37　就学以前における言語使用

	家庭内	友人間
カロン	（日本語） ポルトガル語	ポルトガル語
オキ移	日本語	日本語

3）初等教育時における言語使用は、上の世代か同世代かによって違いが見られる。主にポルトガル語使用であるビラ・カロン地区の 2 世でも、祖父母に対しては、日本語（または、沖縄方言）使用が保持されている。これは就学以前も同様であったと考えられる。

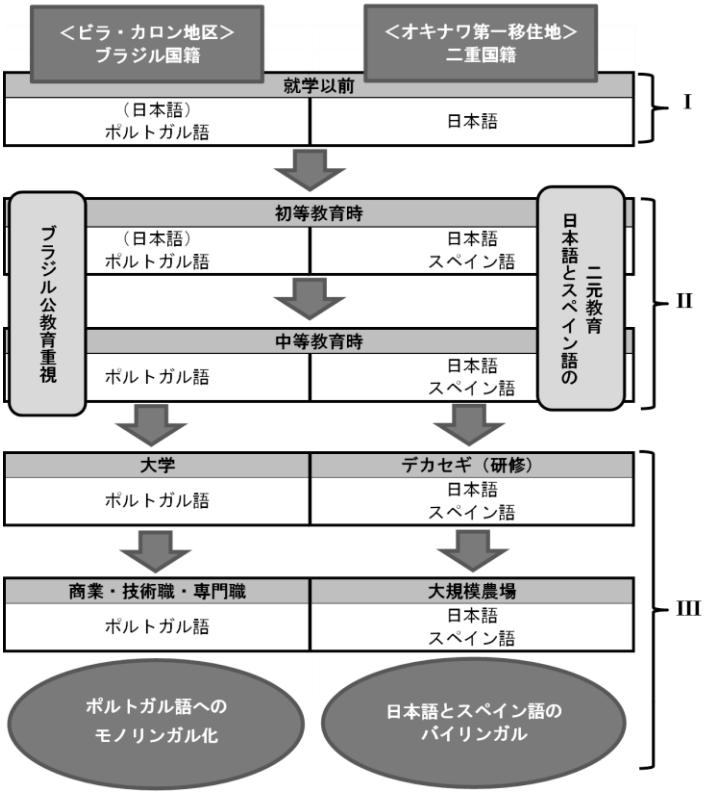
表 38　初等教育時における言語使用

	上の世代		同世代
	祖父母	両親	兄弟・友人
カロン	日本語 ポルトガル語	（日本語） ポルトガル語	ポルトガル語
オキ移	日本語	日本語	日本語 スペイン語

4）中等教育時になると、ビラ・カロン地区でポルトガル語へのモノリンガル化がさらに進む。オキナワ第一移住地では大きな変化は見られない。そして、この結果は、現在における言語使用の実態と同じである。

以上を総合化して、概略を図式化すると次のようになる。

図 5　ビラ・カロン地区とオキナワ第一移住地の 2 世の言語生活史



I.　ビラ・カロン地区の 2 世に見られるポルトガル語へのモノリンガル化は、就学以前にすでに形成されたものである。友人や兄弟など、同世代との会話において先に現われる。祖父母に対しては、日本語使用が保持される傾向が強いが、家庭内では就学以前からポルトガル語中心の生活である。一方、オキナワ第一移住地では、子どものころから、家庭内、友人間ともに日本語が中心の生活である。同世代を中心に、スペイン語を交えることが、漸次増えていくが、日本語の使用も保持されるのである。

II.　I の背景には、両コミュニティ間における次のような違いが関与していると思われる。オキナワ第一移住地では、中学課程までスペイン語と日本語の二元教育を実施し、日本語学習歴も長い。一方、ビラ・カロン地区では、ブラジルの公教育を重視しているため、日本語学習歴が短い。この点については、冒頭に述べたように、朴ほか（2013）で明らかにした。

III. I と II で述べた点は、両コミュニティにおける生活戦術の違いに起因する。ビラ・カロン地区の 2 世は、ブラジル国籍を取得し、高い学歴に基づくブラジル人としての社会的成功を目指すという生活戦術を取る一方、オキナワ第一移住地の 2 世は、ボリビア人とは隔離した教育を行い、日本へのデカセギ（長期研修）を見据えた二重国籍の取得という生活戦術を取っている。この点については、白岩ほか（2011）で述べた。

なお、ビラ・カロン地区の 2 世にも日本語能力意識の高い人が若干名見られるが、このような 2 世の言語生活史を見ると、「家庭内における日本語使用」「デカセギ経験」「日本語学習歴の長さ」「日本語及び日本への高い関心」「日本語に対する強い継承意識」といった、オキナワ第一移住地の 2 世と共通する特徴を有している。

ブラジルには、本土系の日系コミュニティとして、アリアンサ移住地とスザノ市福博村が存在する。これらは、戦前移民を中心とする日系コミュニティではあるが、言語使用や言語能力をめぐる意識においては、ビラ・カロン地区とオキナワ第一移住地の中間的な特徴が見られる。この 2 つのコミュニティについては、李吉鎔氏を中心とする分析が現在進行しており、4 つのコミュニティの精密な比較対照と総合化を今後行っていく予定である。

付記

本稿は、大阪大学 COE プログラム「インターフェイスの人文学」及び大阪大学グローバル COE プログラム「コンフリクトの人文学国際研究教育拠点」における調査データに基づいている。本調査にご協力いただいた移住地の皆様に改めて御礼申し上げます。

注

1）ビラ・カロン地区では、沖縄系移民と本土系移民が、緩やかな棲み分けをしながら共住している。ただし、沖縄系と本土系は異なるエスニック組織（前者は沖縄県人会ビラ・カロン支部、後者はカロン文化体育協会）を形成し、独自の活動を行っているなど、その接触はあまり活発ではない。

2）表中では、「ビラ・カロン地区」を「カロン」と、「オキナワ第一移住地」を「オキ移」として略して表記する。以下同様である。なお、表 1 の「1 成」は「1 世成人」を、「1 子」は「1 世子ども」を意味する。

3）ビラ・カロン地区の 1 名を除く。1940 年代に見られる 1 名は 1941 年に渡航しており、戦前移民である。

4）ビラ・カロン地区では、2005 年 7 月 26 日～28 日、オキナワ第一移住地では、2007 年 8 月 23 日～26 日の談話録音調査の際に補充及び追加調査を行った。

5）15 歳未満の会員、移住地外へ転居した会員、日本でデカセギ・研修中の会員、日系人との婚姻により加入したボリビア人配偶者などは除外した。

6）白岩ほか（2011）と朴ほか（2013）で分析に用いた調査票の項目とその詳細は以下のとおりである。

白岩ほか（2011）
1）言語使用意識に関する項目 a. 家庭での言語使用 ・（祖父母、両親、配偶者、兄弟、子どもに対して）どのことばで話すか／話しかけられるか ・家族全員が揃ったとき、どのことばで話すか b. 社会生活における言語使用 ・仕事中に、沖縄方言／日本語／現地語を使うか ・本土系の友人、沖縄系の友人とはどのことばで話すか 2）言語能力意識に関する項目：言語（日本語／沖縄方言／現地語）能力自己評価 （よく／だいたい／少し／まったく）
朴ほか（2013）
1）日本語学習歴に関する項目：日本語学校への通学経験の有無、通学期間、通学回数 2）日本語と沖縄方言の継承に関する項目 a. 日本語を学習したい（すべき）か／その理由 b. 沖縄方言を学習したい（すべき）か／その理由

7）現地語能力については、現地語を使わざるを得ない環境であったかなど、移民をとりまく生活環境についても注目する必要がある。ブラジルの場合、戦前移民と戦後移民とでは、渡航時の予定が短期的な出稼ぎであるか永住かで違いはあるものの、戦前移民、戦後移民いずれも、移住当初は多くが農業移民である。特に戦前移民の場合、大半はコーヒー耕地の賃金労働者（コロノ）として働いていたとされており、この場合、日ごろから、同じく賃金労働者として耕地内で働くブラジル人労働者やヨーロッパ各地からの移民労働者との接触があったとされている。戦後移民の場合、農業部門での地位上昇とともに経済的地位も上昇し、都市部へと移動、家族労働力を中心とした商工業分野の職種につくようになったことで、言語的な障壁も他の職種に比べると低くなったとされているが、現地人とは分離的居住形態をとっているボリビアのオキナワ移住地とは異なり、ビラ・カロン地区では、非日系人と混住した居住形態になっている（森 2009 を参照）。

8）「学校で」と回答している人が 2 名いるが、渡航時の年齢が 13 歳、15 歳であり、現地での通学経験がある人である。ほかに見られた回答の内訳を示すと、「仕事で指示を出すため」「仕事で」「仕事関係」（以上、ビラ・カロン地区の回答）、「仕事（3 名）」「仕事のとき」「仕事の面」「従業員をつかうとき」「人夫」（以上、ボリビア第一移住地の回答）となる。

9）「農業」と回答している人は、接触場面として、「仕事で指示を出すため」としており、農場に「ガイジン」を雇用していたため、接触があったと思われる。オキナワ第一移住地でも、接触があった人の中には同じような理由を挙げている人が見られる。なお、残り 1 名は、「主婦」との回答である。

10）ほかの 2 名は、学校に通っていた 1 世成人移民で、使用場面について、「少しだけ、学校や店でブラジル人と」「ポルトガル語を習い始めていた」と回答している。

11）ほかの典型的な 1 世とは異なり、「とてもよく」と回答しているが、その理由については、調査票からは確認することができなかった。

12）移民前の神戸移民収容所、移民船では、簡単なポルトガル語講座があった。

13）ビラ・カロン地区の 1 世成人の回答の中で、「学校で」との回答が 1 例見られたが、渡航時の年齢が 15 歳であり、サンパウロ市の高校に通った経験を持っている人であった。

14）「学校で」以外の回答では、ビラ・カロン地区では、「日常的に」という回答が、オキナワ第一移住地では、「仕事の関係。同じように仕事していた」「荷物を取りに行った時など」という回答が見られた。なお、ビラ・カロン地区の場合、販売業と回答している 1 名と未回答 1 名を除けば、移住当初の親の職業についてはすべて縫製業と回答している。

15）オキナワ第一移住地の 1 名（「オキナワ第三移住地」と回答）を除いては、すべてが「学校で」と回答している。

16）同じ頃にサンタクルス県に創設された、本土系移民からなるサンファン移住地があるが、初期にはほとんど接触がなかった。現在においても両移住地間の婚姻関係はほとんどない。接触があったと回答する人は、牧師との接触で、2 名とも牧師が本土系日系人であったと回答している。ビラ・カロン地区の場合、「近所」「仕事、付き合い」「教会」が接触場面として挙がっている。

17）技能別に様々なドメインが設定されているが（詳細については、白岩ほか（2011）を参照）、一つでも未回答が見られる回答者については、ほかのドメインの回答がされている場合であっても、当該技能の平均値を出す際に対象外とした。全体の平均値に影響を及ぼす可能性があると考えたためである。なお、表中の平均値は、小数点以下第 3 位を四捨五入したものである。

18）就学前の友人というのは、主に、親族関係などの集まりで出来る友人、つまり親戚の子どもたちであることが多い。ブラジルの場合、治安等の関係から、また、ボリビアの場合には社会的世界の形成がほぼ移住地という地域に制約されるためである。ボリビアの場合、就学前の子どもは、ほぼ全員が、プロテスタント系教会が経営する幼稚園に通うが、そこでは日本語が使われている。

19）本節で示す百分率は、未回答を除いた有効回答を母数にして計算したものである。

20）「父（日本語／スペイン語）、母（日本語のみ）」との回答者である。集計が困難であったため、「その他」として分類した。

21）除外した数の内訳は以下のとおりである。

		聞ける	話せる	読める	書ける
カロン	未回答	-	-	1	1
	複数回答	-	1	-	-
オキ移	未回答	16	2	13	14
	複数回答	-	-	-	-

22）ビラ・カロン地区とオキナワ第一移住地の日本語学習歴については、朴ほか（2013）を参照されたい。

23）メディアに関する分析結果の詳細については、白岩ほか（2011）を参照されたい。

24）詳細については、朴ほか（2013）を参照されたい。

参考文献

李吉鎔（投稿中）「ブラジル日系社会 2 世の日本語能力の維持に関する要因」『日本語学研究』39（韓国日本語学会）.

工藤真由美編（2012）『ボリビア沖縄系移民社会における談話資料』大阪大学大学院文学研究科日本語学講座工藤真由美研究室.

工藤真由美・森幸一・山東功・李吉鎔・中東靖恵（2009）『ブラジル日系・沖縄系移民社会における言語接触』ひつじ書房.

コロニア・沖縄入植 40 周年記念誌編纂委員会（編）（1995）『うるまからの出発（たびだち）―コロニア・オキナワ入植 40 周年記念誌―』オキナワ日本ボリビア協会.

コロニア・沖縄入植 50 周年記念誌編纂委員会（編）（2005）『コロニア・オキナワ入植記念誌　ボリビアの大地に生きる沖縄移民』オキナワ日本ボリビア協会.

白岩広行・森田耕平・齊藤美穂・朴秀娟・森幸一・工藤真由美（2011）「ブラジルとボリビアにおける沖縄系エスニックコミュニティと日本語」『阪大日本語研究』23.

中東靖恵（2005）「ブラジル日系・近郊農村地域における言語シフト」『文化共生学研究』4.

――――（2006）「ブラジル日系・奥地農村地域における言語シフト」『岡山大学文学部紀要』44.

朴秀娟・森幸一・工藤真由美（2013）「沖縄系エスニックコミュニティにおける日本語と沖縄方言の継承意識―ブラジル及びボリビアの言語生活調査から―」『阪大日本語研究』25.

朴秀娟（2013）「バイリンガルはどのように形成されるのか―ブラジルとボリビアの沖縄系エスニックコミュニティにおける言語生活調査から―」『社会言語科学会第 32 回大会発表論文集』社会言語科学会.

ボリビア日本人 100 周年誌編纂委員会編（2000）『ボリビアに生きる　日本人移住 100 周年誌』ボリビア日系協会連合会.

森幸一（2009）「「言語」をめぐる移民史」工藤真由美・森幸一・山東功・李吉鎔・中東靖恵著『ブラジル日系・沖縄系移民社会における言語接触』ひつじ書房.

――――（2011）「サンパウロ市における沖縄系エスニックコミュニティの成立と展開過程の経済的側面―自営業戦術の累積的連鎖を視点として―」『比較民俗研究』26.

森脇礼之・古杉征己・森幸一（2010）「ブラジルにおける子弟教育（日本語教育）の歴史」ブラジル日本移民百周年記念協会･日本語版ブラジル日本移民百年史編纂刊行委員会編『ブラジル日本移民百年史　第三巻　生活と文化編（1）』風響社.

朴　　秀娟　　（神戸大学講師）
森　　幸一　（サンパウロ大学教授）
工藤　真由美　　（文学研究科教授）